



み仏の里  
熊野磨崖仏

宗教法人熊野神社  
熊野磨崖仏管理委員会  
豊後高田市田染平野 / (0973) 26-2070

# 日本一雄大荘厳な

## 国指定史跡 重要文化財 熊野磨崖仏

### 熊野磨崖仏の特色

昭和三十年二月十五日、国指定史跡に指定され、昭和三十九年五月二十一日、国指定重要文化財に指定された。国東六郷満山の拠点の一つであった胎蔵寺から山道を約三百米程登ると、鬼が一夜で築いたと伝えられる自然石の乱積石段にかかり、この石段を登ると左方の巨岩壁に刻まれた日本一雄大な石仏は大日如来と不動明王であり、これらの石仏群が熊野磨崖仏である。伝説では養老二年（七一八年）宇佐八幡の化身仁聞菩薩がつくられたと云われているが、この石仏の造立年代推定資料となる「六郷山諸勤行等注進目録や、華頂要略」等の安貞二年（一二二八年）の項に「大日石屋」「不動石屋」のことが記されているので、鎌倉初期には大日、不動両像の存在が明確である。また、胎蔵寺が記録にあらわれるのは仁安三年（一一六八年）の「六郷山二十八本寺目録」であるので、磨崖仏の造立は藤原末期と推定されている。

### 鬼が積みし石段を

### 登らば現われむ

### 岩に刻まれし

### 鬼の築いた石段

紀州熊野から田染にお移りになった権現さまは靈験あらたかたか、近郷の人々はお参りするようになってから家は栄え、健康になりよく肥えていた。その時、何処からか一匹の鬼がやって来て住みついた。鬼はこのよく肥えた人間の肉が食べたたくてしかたないが権現さまが恐しくてできなかった。然しどうしても食べたくてある日、権現さまにお願いしたら、「日が暮れてから翌朝鶏が鳴くまでの間に下の鳥居の処から神殿の前まで百段の石段を造れ、そしたらお前の願いを許してやる。然しできなかつたらお前を食い殺すぞ」と云われた。権現さまは一夜で築くことはできまいと思つて無理難題を申しつけられたのだが鬼は人間が食べたい一心で西叡山に夕日が落ちて暗くなると山から石を探して運び石段を築きはじめた。真夜中頃になると神殿の近くで鬼が石を運んで築く音が聞えるので権現さまは

不審に思い神殿の扉を開いて石段を数えてみるともう九十九段を築いて、下の方から鬼が最後の百段目の石をかついで登つて来る。権現さまはこれは大変、かわいい里の人間が食われてしまふ、何んとかしなければとお考えになり声高らかに、コケコウー口と鶏の声をまねられたら、これを聞いた鬼はあわてて「夜明けの鶏が鳴いた、もう夜明けか、わしはこのままでは権現さまに食われてしまふ、逃げよう」と最後の石をかついだまま夢中で山の中を走り、一里半（六キロ）ほど走つてやつと平地に出たが息がきれて苦しいので、かついだ石を放つたら石が立つたまま倒れないのでそこを立石（速見郡山香町）と呼ぶようになった。鬼はそのまま倒れて息が絶えた。これを聞いた里人たちはこれで安心して日暮しが出来る。これも権現さまのおかげと、岩に彫んだ大日さまのお加護であると朝夕感謝するようにになった。



# 日本一雄大荘嚴な

## 国指定史跡 重要文化財 熊野磨崖仏

### 熊野磨崖仏の特色

昭和三十年二月十五日、国指定史跡に指定され、昭和三十九年五月二十一日、国指定重要文化財に指定された。国東六郷満山の拠点の一つであった胎藏寺から山道を約三百米程登ると、鬼が一夜で築いたと伝えられる自然石の乱積石段にかり、この石段を登ると左方の巨岩壁に刻まれた日本一雄大な石仏は大日如来と不動明王であり、これらの石仏群が熊野磨崖仏である。伝説では養老二年（七一八年）宇佐八幡の化身仁聞菩薩がつくられたと云われているが、この石仏の造立年代推定資料となる「六郷山諸勤行等注進目録」や「華頂要略」等の安貞二年（二二二八年）の項に「大日石屋」不動石屋のことが記されているので、鎌倉初期には大日、不動兩像の存在が明確である。また、胎藏寺が記録にあらわれるのは仁安三年（一一六八年）の「六郷山二十八本寺目録」であるので、磨崖仏の造立は藤原末期と推定されている。

### 鬼が積みし石段を

### 登らば現われむ

### 岩に刻まれし

### 大いなる仏よ

### 大日如来像

全身高さ六・八米、脚部を掘って見ると石畳が敷かれ、地下に脚部が埋没しているのではなく半立像であり、尊名は大日如来と云われているが、宝冠もなく印も結んでいないので薬師如来ではないかとみるむきもあるが、やはり大日如来の古い形ではなからうか。



頭部の背面に凹い光背が刻まれ面相は頬張つた四角い顔にとぎすました理智の光と思想の深みが感ぜられ、森厳そのものであるが、また慈悲の相も感ぜられる。

### 不動明王像

総高約八米、大日如来と同じく半立像で下部はあまり人工を加えていない。右手に剣を持ち、巨大且つ雄壮な不動明王であり、左側の弁髪はねじれて胸の辺まで垂れ、両眼球は突出し鼻は広く牙をもつて唇をかんでいるが、一般の不動らしい忿怒相はなく、かえって人間味ある慈悲の相をそなえており、やさしい不動様である。



### 種子曼荼羅 (しゅじまんだら)

円形頭光の上方に三面の種子曼荼羅が隠刻されており、中央を理趣教曼荼羅右方を胎藏界、左方を金剛界曼荼羅と云われて修験道霊場であったことが証明される。

### 脇童子

不動明王の両脇に鈴羯羅童子（こんがらどうじ）、制吒迦童子（せいたかどうじ）が刻まれてあるが剝離崩壊がひどく存在が認められるのみである。

### 神像

不動明王左脇侍像の外側に高さ一・五米ほどの方形の甍が二つ刻まれており中子冠を戴き袍を付ける男神像の存在が認められる。この地が熊野神社境内であることを思えば、この二軀は家津御子、速玉の二神と想像され右方の崩れた処にも夫須美神が刻まれていたものではなからうか。

### 熊野権現の祭典

旧正月二十八日、九日と旧六月一日が例祭であり、六月の祭は紀州熊野からお迎えした日で、お供えが間にあわなくて、いそいで小麦粉をフルイにかけずそのまま団子にして供えたので、今でも同じように造られた団子をして供え、かわりに神前の団子と取りかえて帰っていたと、子どもは元気で育ち一家は無病息災、商売は栄えるので多くの参拝者がある。

# 国東の山のまほらぎ 揚羽蝶

清行

句集「海境」、月刊俳句雑誌「青嶺」の主宰岸原清行さんの秀句「磨崖仏千年が過ぎ蝶が過ぐ」の句碑が参道にあります。

日本一大きな大威徳明王  
み仏が迫る、  
心に語りかけてくる。



## 真木大堂の特色

真木大堂は六郷満山65ヶ寺のうち本山本寺として36坊の霊場を有した最大の寺院であった馬城山伝乗寺のことである。

奈良時代元正天皇の養老年間に仁聞菩薩の開基で悲陀の匠が建立したと伝えられているが仏像の作風からみて平安時代の建立で往時は広大な境内のなかに七堂伽藍を備えて隆盛を誇った大寺院であった。

約700年前に火災のために焼失したが現存する九体の仏像は当時の人々の厚い信仰と守護のもとに難をまぬがれて今日に至っている。

この九体の仏像には全霊を捧げつくして作られた方々の魂がこもっている。

大正7年に国宝に指定され、昭和4年に仏像大修理、昭和25年に重要文化財に指定された。

附近には随願寺、成願寺、釈迦堂、芝堂、閻魔堂、黒草堂、城山四面仏等々あり附近の畦畔には、石碑、石塔等散乱しているのをみても昔の寺坊が各所に散在し、往時の規模宏壮が偲ばれる。

現在の真木大堂は伝乗寺の各寺坊が衰退したので本尊をこの一堂に集めたものである。